

新収資料展「万博体験のパートナー、手持ちデバイス展」の実施

渡 部 義 弥^{*}、野 村 美 月^{*}

概 要

大阪市立科学館では、2025年に開催された大阪・関西万博のパビリオンで展示装置として使用された「手持ちデバイス」を収集し、それらをいち早く公開するための新収資料展「万博体験のパートナー、手持ちデバイス展」を実施した。本稿ではその実施プロセスおよび内容、アンケート結果から明らかになった観覧者の反応を紹介する。

1. はじめに

2025年4月13日～10月13日まで、大阪市此花区夢洲にて、大阪・関西万博（以下万博）が開催された。大阪市立科学館では、この万博レガシーの継承のため、万博会場で使われた物品を資料として収蔵することを検討した。その収蔵資料として、パビリオンの展示体験用に一人ひとりに手渡され使用された専用の電子デバイス（以下、手持ちデバイス）を緊急に収集した。

資料は12パビリオンのものを寄贈いただいた。また展示に限って賃借することができるものもあった。結果、収集年度内に、14パビリオンの資料を展示する、新収資料展「万博体験のパートナー、手持ちデバイス展」を2月18日～4月26日まで開催した（写真1）。本稿では、この新収資料展について述べる。



写真1. 新収資料展展示会場

2. 「新収資料展」について

大阪市立科学館では、年に数回「企画展」を実施している。これらは、常設展では紹介しきれない内容を、テーマに沿って、館内外の資料や展示装置を展示することで実施するものであり、原則、前年度までに企画をし、事業計画と予算書に位置付けたうえで実施する。会場は、2024年のリニューアル以降は、常設展示場1階の「みんなのサイエンス・ラボ」で実施している。

2025年度は、前年から継続した[1]「万博で夢見たサイエンス展」のほか、「プラネタリアム100年」、「極限時空・ブラックホールと重力波」、「MIRAI-Bit展」、「静電気の世界」を実施した。また、当初事業案になくとも、外部からの資料提供などで実施する場合もあり「野辺山天文台展」が実施された。[2]本研究報告誌でも実施状況が紹介されているので参照されたい。

一方、今回実施した「新収資料展」は「収集した資料をいち早く市民に紹介する」という位置づけで行った。

資料の調査研究などが途上であっても、収集資料と関連情報は市民に公開し、大阪市立科学館の財産となったことを告知することを目的としている。また、資料寄贈者に謝意を示すために公開する機会ともなる。

本展では、大阪市立科学館を管理運営する地方独立行政法人大阪市博物館機構の年度計画[3]にある万博レガシー継承となること、また万博アメリカパビリオンに展示されていたスペース・ローンチ・システム（以下SLS）模型の常設展示[4]にあわせ公開することもあり、「新収資料展」の体裁で実施した。

^{*}大阪市立科学館
watanabe@sci-museum.jp

3. 手持ちデバイスの収集

3-1. 収集にいたる構想

本展では、万博で使われた手持ちデバイスを収集し、展示した。

手持ちデバイスは、筆者の造語であり、万博の各パビリオンで展示専用機器のうち、来場者一人ひとりに手渡されて使用された ICT 技術を使ったデバイスを指している。これらは、パビリオンの演出や役割に応じて、シンプルな RFID タグを組み込んだものから、3D ハプティクスといった先端技術を使って使用者に不思議な感覚を与えるものまで多彩だった。収集した手持ちデバイスの一覧を表1に示す。

筆者らは、万博にプライベートで参加している最中に、パビリオン展示に多くの手持ちデバイスが使われていることに気づいた。展示を行う立場からすると、手持ちデバイスの配布と回収、メンテナンス、破損や紛失、作動不良など、安定運用の難しさを感じるものだけに、莫大な人数が参加する万博において、これら手持ちデバイスが運用されていることにまず驚きを感じた。

次に、パビリオンで手持ちデバイスを携えながら観覧することで、展示観覧がより主体的なものになることを感じた。すなわち、手持ちデバイスをパビリオンの什器にあてたり、携えながら歩いて反応を知ること、展示に主体的にかかわり、それぞれの思いで展示とふれる、「展示のパーソナライズ(個人化)」とでもいうような効果があり、それによって、それぞれの展示の向き合い方が活性化されているように感じたのである。

一例として、収集した手持ちデバイスの一つである、ドイツパビリオンの「おしゃべりサーキュラー(写真2)」は、従来からある音声ガイドの役割を果たすものだが、展示の様々な発見を主体的に行わせるように感じた。



写真2. ドイツパビリオンのおしゃべりサーキュラー
展示パネルにあるタッチポイントに接触すると、そのガイド音声の口の部分から話し、耳にあてて使う。七色に発光し、歌を歌うといった隠し機能もあった。

表1. 収集した展示手持ちデバイス

これらの手持ちデバイスのほか、パビリオンがわのタッチポイントや収納什器や予備什器も寄贈いただいている。

手持ちデバイス名	手持ちデバイスの機能
おしゃべりサーキュラー (EXP02025ドイツパビリオン)	音声ガイドスピーカー、 発光演出、手持ちデバイス相互演出
ランタン型手持ちデバイス (EXP02025住友館)	音声ガイド、発光演出
スマートフォン・キャリア (EXP02025シグネチャーパビリオンいのちの未来)	音声ガイド(骨伝導)
オーブ (EXP02025オランダパビリオン)	展示観覧チェック、発光 および振動、手持ちデバイス相互演出
リボンバンド (EXP02025大阪ヘルスケアパビリオン・リボン体験)	ヘルスケアデータの記録 および読み出し
スマートブレスレット (EXP02025TECH WORLD パビリオン)	心拍データの記録および読み出し
ふしぎな石ころ echorb (EXP02025シグネチャーパビリオン Better Co-Being)	3D ハプティクスによる 誘導、演出
懐中電灯型手持ちデバイス (EXP02025関西パビリオン・福井県ゾーン)	赤外線照射による展示 操作
虫眼鏡型手持ちデバイス スカバー (EXP02025関西パビリオン・鳥取県ゾーン)	AR 手持ちデバイス
タマゴ型手持ちデバイス 外殻(EXP02025電力館)	展示のチェックおよび展示の 起動キー、記録
結晶手持ちデバイス (EXP02025パナソニック グループパビリオン「ノモの国」)	展示のチェック、記録
人生ゲーム体験用コントローラーケース (EXP02025大阪ヘルスケアパビリオン・人生ゲームREBORN in 2025)	ゲーム操作アプリ

筆者のうち渡部は、2024年度に1970年の万博の企画展「万博で夢見たサイエンス展」を開催したさい[1]に、当時のパビリオンで使われていた展示関係資料がなく、展示企画に苦心をした。2025年の大阪・関西万博については、万博ホストシティ大阪市の科学館として、万博を特徴づけるパビリオン展示に直接使われていた資料を未来のために収集しようと考えていた。

これら「手持ちデバイス」は、今回の万博を特徴付け、大阪市の科学館で収蔵する資料としてうってつけではないかと考えた。理由は次の通りである。

1. 多数作られているが持ち帰られることはなく、一般

の人々の手では収集されない。

2. 万博専用で作られているためオリジナル性が高い
3. サイズがコンパクトで収蔵、展示しやすい
4. 万博期間中、多くの人の手に触れ、記憶にも残り、あとで見たとき体験者は万博の思い出を想起する
5. なにより展示体験のパーソナライズというこれまで主流ではなかったものが一気に登場した展示技術の転換点の証拠となる。前回のドバイ万博ではほぼ現れなかった。これは、当時コロナ禍で接触デバイスが推奨されなかったためもある。

以上をふまえ、手持ちデバイス収集は万博会期中の8月ごろに構想し、どんなデバイスがどこで使われていたかの予備調査を行って数量の検討をつけたうえ、予算に調査研究予算の一部を使用することにし、10月初頭に収集計画を決裁し、10月13日の会期終了前からパビリオン関係者に働きかけをはじめた。

なお、収集時には「パーソナル・デバイス」と呼称していたが、一般のスマートフォンなどにも使われていることがわかり、新収資料展を企画する時点で「手持ちデバイス」という表記を使うことにした。

3-2. 実際の収集活動

収集は、「大阪市立科学館なので、大阪市から号令をかけて、パビリオンから寄贈された」と考える方も多いようなのだが、そうではない。その誤解を解くために簡単に述べておく。収集活動には時に多大な労力がかかることもあるが、逆に極めて簡単に済むことがあるので、そのあたりを承知してもらいたい。

まず、収集の趣旨を A4・2枚程度の企画書にした。大阪市立科学館の役割を簡単に述べたあと、なぜ収集するのかどんな意義があるのか、どのように収蔵保管、活用して、それがどう社会に貢献することになるのかななどを明確にするためである。特に、収集するのはパビリオンのアピールしたい内容ではなく展示装置であるため、科学館でパビリオンがすぐれた展示手法を駆使したことを評価していると強調するものにした。

また、あわせて手持ちデバイスに付随する取説などのドキュメントや、手持ちデバイスを使用しているシーンを含む画像や動画の提供もお願いした。当方でもホームページなどの公開情報をローカル保存するとともに、プライベートに撮影した画像や動画なども集積した。調査研究や展示に資するためである。

なお、前述のドイツなど、海外パビリオンからも収集する必要があったため、英文でもこれを用意した。

これらの企画書をもって、科学館のスタッフ総出で各々の伝手をたどり、伝手がないものはパビリオンの問い合わせ窓口や、関連企業のアドレスなどに直接電話

やメールを書いて問い合わせた。これは、万博終幕の時期（使用が終わらないと収集はしにくい）、そして撤収という非常にあわただしい時期に行った

いくつかのパビリオンについては、終了後に使用したものをできるだけ再利用するというポリシーを持っており、それに沿ってすぐに色よい返事をいただいた。ただし、あわただしい時期だったために、返事のあとのアクションがなく、何度か詳細をつめて、寄贈までに数カ月を要することもあった。

また、ある海外パビリオンでは、窓口がわからず、最終的に大使館に問い合わせをしたうえで、そこから現場におろしていただいたところもあった。他には、関係する企業博物館から博物館同士の交流を通じてお願いしたり、村田製作所など手持ちデバイスの製造・提供メーカーにお願いしたりしたケースもあった。また、求められて、これまでに収集できたもののリストを渡したりし、最初の企画書に沿って、いかに展示技術において画期的なできごとであったか、展示の展開法の良さを高く評価しているなどをお伝えし、理解を求めた。

この過程で、断られたところもふくめ、全て真摯に検討いただいた。断る理由も、全数次の企画に使うからといったことや、海外パビリオンのもので有価値とみなされるものは通関の問題がからむことなど明確な理由があった。

このようなことで、10月13日の万博会期最終日に収集できたドイツパビリオンの手持ちデバイス、おしゃべりサーキュラーから、1月28日に提供いただいた手持ちデバイスまで、4か月間に当初目標の10を超える12のパビリオンの手持ちデバイスを収集することができた。

なお、資料の受け渡し方法はまちまちで、引き取りにうかがったもの（写真3）、送付していただいたもの、引き渡しに当方に来ていただいたものなどがあつた。



写真3. オランダパビリオン跡地での資料引き渡し
左が野村、中央が渡部、右がオランダパビリオン館長の Nardy 氏。万博終了後の撤収作業中に引き渡していただいた。

当方の来訪や引き取りが可能なのはそもそも「持ち」デバイスゆえハンドキャリアが容易であったという理由もあった。なお持ちデバイスを展示で使用するための展示施設がわに設置されていた大型のタッチ(チェック)ポイントの寄贈も受けたオランダパビリオンと大阪ヘルスケアパビリオンについてはタクシー、軽トラック便を使用しての引き取りとなった。

3-3. 収集のさいのエピソード、コメント収集

直接の受け渡しのさいは、パビリオン担当から直接パビリオン運営のエピソードを聞く貴重な機会となった。

電力館の担当者からは、持ちデバイスである「タマゴ型デバイス」について、最後に回収するさいに、子供が返したくないといって泣き出してしまったという話を聞いた。デバイスを使っただけの展示体験は15～20分間というところである、タマゴ型デバイスは展示装置を起動するキーとしても使われたということであったが、それがあれば楽しい体験ができる「魔法のカギ」のように感じられたのであろう。色とりどりに発光し、首から紐でぶらさげて、自分のタマゴのように使う持ちデバイスが、そのデザインもあいまって、わずかな時間にかけるがえのないパートナーになったことの証左であった。

また、別のパビリオンからは、来場者が回収に気が付かず、そのまま身に着けたまま出てしまいそうになるというエピソードが紹介された。身に着ける、手に持つということがいかに自分事になるかを示すものである。このパビリオンは海外からの持ち込みであったため、悪意はなくても盗難になると警察への届け出など煩雑な手続きをしないといけない。オペレーションを見直して、確実に回収するようにしたという話をうかがった。

また、他のパビリオンや展示製作者のコメントを聞くこともあった。パナソニック グループパビリオン「ノモの国」の結晶という持ちデバイスは、最後に返却口に返すと、個別の体験カードが出てくるという仕組みになっていて、他のパビリオン担当から、非常に巧みな仕組みだと高い評価を得ていた。こうしたコメントが拾えたことも、収集活動の成果であるといえる。

4. 新収資料展「万博体験のパートナー、持ちデバイス展」

4-1. 概要

本展は2026年2月18日(水)から4月12日(日)まで実施することとし、評判であることから会期を4月26日(日)まで延長した。

実施場所は展示場1F みんなのサイエンス・ラボの前半部分であり、中央の広場部分は他のイベントも実施できるようにあけた。イベントがない時は、後述するように映像を見てもらったり、触る体験をする会場として

使用した。

展示ケースは横長150cmのものが4本で、各3パビリオン分のデバイスを展示、他に60cmのサイコロ状のケース2本では、各1パビリオンの展示を行い、一部露出で大型の資料を展示した。会場の様子は写真1に示した通りである。

4-2. 位置づけ

資料収集のさいに、企画書を作成し、依頼先に示したことは、3-2節で述べた通りである。この企画書では、取り扱いについて次の2点を記載していた。

一つは、収集した持ちデバイスは、大阪市立科学館のミュージアムコレクションとして次世代へ継承するための収蔵保管を行うこと。もう一つは、資料が集まったところで、展示公開をすることであった。

展示には10年といった単位で展示する常設展と、数週間から2カ月くらい展示する企画展等がある。常設展については、時間をかけて全体の展示プランを決めて行うもので[5]、今回にはなじまない。もちろん、アメリカパビリオンのSLS模型の展示[4]のように、常設展に追加ということも考えられるが、今回は従来ない新しい展示技術の現れというテーマで、かつ「資料群」として収集したので、既存の常設展にははまらず、自然と企画展等でということになった。

一方、今回の収集は、万博会期中にその様子をみて始めたものなので、企画展のようにあらかじめまとめた調査がバックにあるわけではない。また、SLS模型の展示公開が2月中旬くらいからとなっており、万博レガシー継承の紹介という位置づけで同時公開が相応しいという判断もあり、緊急展開が可能な新収資料展という位置づけが相応しいと考えた。

4-3. 構成

新収資料展なので、ミニマムな構成としては、タイトルと趣旨パネルを作成し、収集した資料をケース内にならべるということになる。1月末まで収集した資料を2月中旬からスピーディに展示するために、この構成をとった。(写真4、5)

なおし、収集活動の過程で、今後使用していくため寄贈はできないが、展示中の貸し出しなら可能という返事をもらっていたカナダパビリオンのAR端末があり、これを加えての展示とした。

また後日、展示を観覧していたシグネチャーパビリオンのいのちのクラゲ館の関係者から、同館が使用していたAR展示用のカードを、展示用に貸し出せるので加えてほしいという話があり、これも加えた。

展示資料一覧を、表2に示す。



写真4. 展示の様子



写真5. 展示の様子

表2. 展示資料一覧

資料名には表1のように(EXPO2025XX パビリオン)とつけているが、この表では紙面整理のために省略。

資料名	所蔵
おしゃべりサーキュラー 2体 (ドイツパビリオン)	当館
タッチポイント・フォーム(ドイツパビリオン)	当館
タッチポイント・バームクーヘン型フォーム(ドイツパビリオン)	当館
おしゃべりサーキュラー専用スタンド (ドイツパビリオン)	当館
ランタン型手持ちデバイス (住友館)	当館
スマートフォン・キャリア (シグネチャーパビリオンいのちの未来)	当館
オーブ(オランダパビリオン)	当館
チェックインミラー「チャージ」 (オランダパビリオン)	当館
チェックポイント(オランダパビリオン)	当館
リボンバンド 2本 (大阪ヘルスケアパビリオン・リボン体験)	当館

タッチポイント (RFID リーダ) 2本 (大阪ヘルスケアパビリオン・リボン体験)	当館
スマートプレスレット (TECH WORLD パビリオン)	当館
ふしぎな石ころ echorb (シグネチャーパビリオン Better Co-Being)	当館
ふしぎな石ころ echorb 内部開口状態 (シグネチャーパビリオン Better Co-Being)	当館
懐中電灯型手持ちデバイス (関西パビリオン・福井県ゾーン)	当館
虫眼鏡型手持ちデバイスカバー (関西パビリオン・鳥取県ゾーン)	当館
虫眼鏡型手持ちデバイスカバー用スマートフォン Google Pixel Fold(※)	グーグル 合同会社
タマゴ型手持ちデバイス外殻(電力館)	当館
結晶手持ちデバイス 3個 (パナソニック グループパビリオン「ノモの国」)	当館
人生ゲーム体験用コントローラーケース (大阪ヘルスケアパビリオン・人生ゲーム REBORN in 2025)	当館
人生ゲーム体験用コントローラー用 iPhone16モックアップ(※) (大阪ヘルスケアパビリオン・人生ゲーム REBORN in 2025)	個人蔵
AR 端末 (カナダパビリオン)	カナダ大 使館
ごちゃまぜオーケストラ用 AR カード 5枚(シグネチャーパビリオン いのちの遊び場 クラゲ館)	株式会社 steAm

※これらは市販品のレンタルで会期終了後はパビリオンがわも所有しておらず、同一品を展示した。

4-4. 展示解説パネルとその構成

写真4、5に見えているように、各展示には、「手持ちデバイス」のパビリオン一つごとに1枚の展示解説パネルを作成した。パネルの作例を写真6に示す。

パネルは、手持ちデバイス名称、使用パビリオン情報、手持ちデバイスの使われ方を示した。手持ちデバイス単体では、それがどのように作動したのかがわからないため、それを伝えるためであった。

また、これらの原稿は、各パビリオンにデータを求めて文体を整えながら作成し、さらにパビリオンや手持ちデバイス製作等の「メッセージ」を掲載するようにした。これは、製作者やパビリオン関係者側の考えや、生の声を知ることができる貴重な内容で、観覧者には非常に好評であった。



写真6. 展示解説パネルの例

4-5. 映像の紹介

パネル同様、手持ちデバイスがどのように使われたのかを示すために、映像の紹介を行った。ただ、当方で撮影を行うことは様々な制約で難しいので、各パビリオンにお願いして、それぞれが持っているプロモーションや記録用の映像を提供していただいた。中にはわざわざ編集いただいた、大阪ヘルスケアパビリオン・人生ゲーム REBORN in 2025のケースもあった。

これらは会場の「みんなのサイエンス・ラボ」の大型スクリーンおよびいくつかのサイネージでループ再生を行った（写真7）



写真7. 映像の紹介の様子



写真8. ドイツパビリオン映像の紹介の様子

また、ドイツパビリオンの（おしゃべり）サーキュラーは、特に人気であったため、17分間のパビリオン体験映像を別のサイネージで視聴するようにした（写真8）。

4-6. 触る体験

本展で展示したものは、博物館資料として一般観覧者に触っていただくわけにはいかない。しかし、もともと手に持って使われていたものであるので、重さや材質感、発光など作動した様子を示したいとも考えた。

デバイス寄贈のみなさんにこうしたことを伝えたとこ、次の7デバイスについて、触れるものの貸し出しなどで提供いただくことができた。大阪市立科学館サイエンスガイドボランティアのみなさんをお願いして「触る体験」を不定期にすることにした。

表3. 触る体験を行ったデバイス

ここではデバイス名のみ表記する

デバイス	体験内容
人生ゲーム体験用コントローラーケース	持ってみる
オーブ	持ってみる 発光もする
カナダパビリオン 手持ち AR 端末	デモモードによるパ ビリオンと同じ体験
タマゴ型デバイス	持ってみる 発光もする
結晶デバイス	持ってみる
ふしぎな石ころ echorb	デモモードによる作 動体験
ごちゃまぜオーケストラ用 AR カード	アプリによるパビリ オンと同じ体験

体験の時間については、集中を避けるためと予定通り行えないケースも考え、事前には非公開としたが、来

館者から質問が多いため、途中から館内では当日朝には予定を共有し、館内で質問された場合には、実施時間をお伝えできるようにした。

なお、この触る体験は、93回実施5,011名参加を数えている。



写真9. 触る体験の様子

4-7. ドイツパビリオン「おしゃべりサーキュラー」音声デモ

繰り返しになるが、手持ちデバイスの中で、最も人気だったのはドイツパビリオンの「おしゃべりサーキュラー」であった。サーキュラーは、ドイツパビリオンのマスコットの的なキャラクターであり、着ぐるみ、映像、さらにお土産のぬいぐるみなど多彩に展開されていた。

今回の収集の中で、ドイツ総領事館の協力で最初に寄贈されたものであるが、音声ガイドの声がかわいらしく、子供にも人気であった。

ただ、同じ体験はしていただけないということで、サーキュラー開発元のドイツ facts & fiction 社に依頼して、音声ファイルを提供いただいた。これをサンプラーに入れ、デモンストレーションで聞いていただけるようにした。自由に聞いていただく展示装置にすることも画策したが、来館者の操作に耐えるものを資料展中に作ることができず、スタッフ操作のデモを適宜おこなった。

4-8. ギャラリートーク・コロキウム等

渡部、野村で適宜ギャラリートークを行い、その中で触る体験、おしゃべりサーキュラーの音声デモも行った。これも不定期におこない、24回実施し、741名参加であった。なお、最終4月25日と26日の土日2日間についてはSNSおよび現地パネルで予告し、渡部が各3回ずつ6回を集中して行った。最終回は150名が集まり、会場があふれるほどであった。

また、関連してプラネタリウムの学芸員スペシャルで4月11日に「科学館は万博だ！ 全天映像から手持ち

デバイスまで」を渡部が実施。

さらに、4月9日のコロキウムでも本展についての紹介を行った。

4-9. その他、取材対応等

本展はリリースを行ったところマスコミも注目し、相当数の取材対応を行った。万博の展示関係の実物が見られる企画は意外と少なく、アフター万博の目玉の一つとしてとらえられていた。

5. アンケート、評価

本展では、会場内に二次元コードを設置し、アンケートをとった。アンケート項目は次の通りである。回答数は会期中に348件であった。

1. 観覧日
2. どこから来ましたか？（市内、府内、国内、海外）
3. 展示についてコメントをお願いします。できればその理由も。
4. 来館の目的（企画展、常設展等）
5. 展示している中で、万博会場で体験したデバイス
6. 万博には何回くらいいかれましたか？
7. 本展示の中で、特に興味をひいたのはなにですか？
8. 科学館にくる頻度

このうち、観覧日はアンケートの頻度を掴むためのものであり、呼びかけをしただけに増えるという結果がでた。項目2. 4. 8. については図1. 図2. 図3. の通りである。

どこから来ましたか？ Where From
348 件の回答

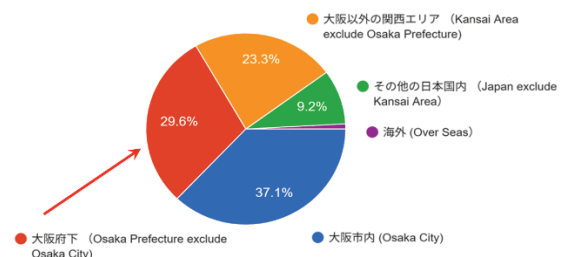


図1. どこから来たか？

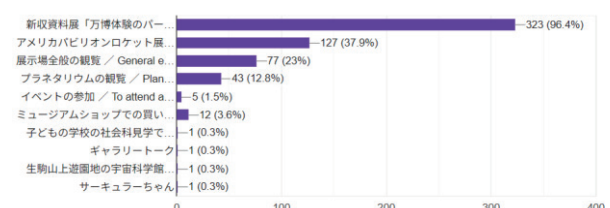


図2. 来館の目的

当館へのご来館について、あてはまるものを選んでください。

132 件の回答

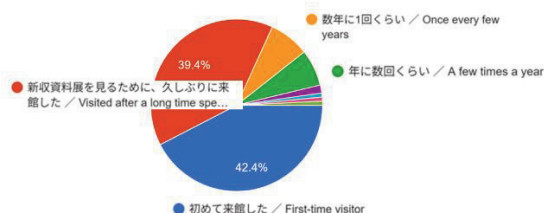


図3. 科学館にくる頻度

図1のどこから来たかの結果は、おおむね通常の大阪市立科学館の来館状況と同じである。

一方、図2、3については、明確に本展を目的で来た来館者が多いことがわかり、展示の効果が表れている。ただし、回答バイアスがかかっている可能性はある。

次に自由に記載された、3. 展示についてコメント 7. 本展示の中で、特に興味をひいたのはなに？ について AI にて要約すると次のようになった。

1. 高い満足度と懐かしさ: 多くの来館者が万博の思い出を懐かしく振り返り、再びデバイスに「再会」できたことに強い喜びを感じている。
2. 未体験の補完: 万博当日に並んで入れなかったパビリオンのデバイスや、存在を知らなかったデバイスを間近で見ることができ、新鮮な驚きを持って迎えられている。
3. 内部構造や仕組みへの興味: デバイスの内部（中身）が見える展示や、デザイナー・制作会社側の解説コメント、技術的な仕組みの紹介が非常に好評である。
4. 映像展示の相乗効果: パビリオン当時の PR 映像や紹介動画と一緒に流れていることで、当時の臨場感がより鮮明に伝わると高く評価されている。
5. 体験への強い要望: 実際に触れたり体験できたりした来館者は大満足している一方、触れられないタイミングだった人からは「実際に触ってみたかった」「体験日をもっと事前に公開してほしい」という声が多く寄せられている。
6. 学芸員による解説の好評さ: 学芸員によるおもしろく専門的な解説（ドイツ館のおしゃべりサーキュラーの音声の秘密など）に感銘を受け、能動的な学びが得られたとする意見が目立つ。
7. 広域からの来館とリピート要望: 横浜や岐阜など遠方からこの展示を目当てに来た熱心なファンもあり、5年後や10年後の節目での再展示や、期間延長・次回開催を望む声が非常に多いです。

また、言及が多いデバイスは次の通りであった、

1. サーキュラー（ドイツパビリオン）: 136件
2. ふしぎな石ころ echorb (Better Co Being) : 57件
3. ランタン(住友館) : 10件
4. 結晶デバイス(パナソニックグループパビリオン「ノモの国」) : 8件

サーキュラーが非常に人気であるが「可愛さ」の言及が多く、ふしぎな石ころ echorb は、その機能の高さ、技術、内部公開の展示が評価されていた。

6. おわりに

本展は、新収資料展としては人気を博した。これは人々が万博を振り返るって楽しむ「アフター万博」が状況を呈したおかげと見ることもできる。再度の実施を期待する声も高いが、次回実施するなら企画展として、2027年の横浜での園芸博もふくめた展示技術についての企画展など一歩進めた内容にする必要がある。ただし単発で人気のサーキュラーと echorb にしぼったミニ展示をするのも来場者の満足につながるであろう。

謝辞

本展実施にあたっては、パビリオン関係者に、寄贈・貸与はもとより紹介パネルの監修やコメント、映像の提供など資料提供を大きくこえる支援をいただいた。また、(公財)2025年日本国際博覧会協会には、パビリオンとの連絡調整や文言の確認などにご協力いただいた。

万博の撤収作業の多忙な時期に我々のために労を負っていただいたことに深く感謝申し上げます。

参考文献

- [1]渡部義弥ほか, 企画展「万博で夢見たサイエンス展」実施報告, 大阪市立科学館研究報告, 2025, 第35巻, p47-56
- [2]各著者, 各内容, 大阪市立科学館研究報告, 2026, 第36巻, p31-52
- [3]地方独立行政法人大阪市博物館機構 年度計画令和7年度, https://ocm.osaka/sys/wp-content/uploads/2025/09/nendokeikaku_20250918.pdf (2026年7月8日閲覧)
- [4]渡部義弥, 「大阪関西万博アメリカパビリオン「スペース ローンチシステム 1/32モデル」の寄贈受入および常設展示化, 大阪市立科学館研究報告, 2026, 第36巻, p87-90
- [5]吉岡克己, 大阪市立科学館展示場リニューアルの全体像, 大阪市立科学館研究報告, 2024, 第34巻, p87-88